

論文

妻へのインタビュー談話に表出する子育てスタンスの日米比較

A Comparative Study on the Stance-taking of Japanese and American Women in Narratives about Childrearing

井出 里咲子 (Risako IDE)

筑波大学人文社会系 准教授

日米の母親の子育てに関するインタビュー談話において、子育てへのスタンスはいかなる形で表出するのだろうか。本稿は、初対面の女性調査者に対し、日本人とアメリカ人の出産、育児経験者である女性たちが、自身と夫との関係性や夫の子育てについてどのように言及するかを言語人類学のディスコース分析の手法を用いて比較考察するものである。本稿の目的は、インタビューデータの文字化資料をもとに、日英語のナラティブ談話で使用される言語資源の分析を通して、語りの中に指標される規範意識を明らかにすることである。日本語データでは、授受補助動詞の使用と語られる対象の名詞化現象の分析を中心に、妻が子育てにおける夫婦のスタンスをどのように捉えているかを考察する。一方の英語データでは、人称代名詞と談話標識が作り出すナラティブのメタフレームを明らかにし、妻の子育てに対するスタンスと家族との関係性について考察する。結論として、インタビュー・ナラティブというやりとりの場において、その場にはいない夫の子育て関与や夫婦・家族の在り方への規範や役割意識が、日英語の言語使用によって指標され、スタンスとなって表出する過程を文化として読み解く。

With regard to the relationship between narrative and culture, Hill notes that “discourse is the most important place where culture is both enacted and produced in the moment of interaction” (Hill 2005: 159). In this paper, I demonstrate how interview narratives can be a site where culture is discursively enacted by analyzing Japanese and English narratives of childbirth and childrearing. By focusing the analysis on particular linguistic resources used by the speakers to index their positions in relation to the other family members in the story-world as well as towards the interview context, I demonstrate how narratives not only embody assessments but can also illuminate cultural presuppositions related to childrearing and family relationships. By comparing the narratives, I discuss how cultural presuppositions can be evoked through the use of give-and-receive supportive verbs and nominalization process in the case of Japanese discourse, and through the use of personal pronouns and the discourse marker *but* in the case of English.

キーワード：インタビュー・ナラティブ 談話分析 日英語比較 授受補助動詞 人称詞

Keywords: Interview narrative, Discourse analysis, Japanese-English comparative study, Giving-and-receiving supportive verbs, Personal pronouns

はじめに¹

2015年8月28日に可決、成立した「女性活躍推進法」は、第三次安倍内閣が掲げる成長戦略の中核の一つである。女性が仕事と家庭とを両立できる社会環境整備の推進を目的とするこの法案は、女性

¹ 本稿は科学研究費研究挑戦的萌芽(22653060、平成23～25年度、研究代表者：大阪大学 秦かおり)の成果の一部である。また本稿は平成26年11月の日本英語学会シンポジウム「ナラティブ研究における社会貢献の可能性を巡って」、及び平成27年3月の愛知大学ラウンドテーブル(主催 片岡邦好)「参与(関与)枠組みの不均衡を考える」において個人発表を行った報告を基にしている。調査に協力していただいた日米の協力者の皆さん、また協力者を紹介くださった山西文子さんと Michiyo Letterman さんに感謝致します。また本稿の執筆段階で、二名の査読者の方々に非常に貴重なコメントとご指摘を頂戴しました。ここに記して感謝致します。いただいたご指摘はデータの提示方法や分析にかかわる大切な内容であり、本稿ですべて応えることができなかったものの、今後のデータ分析の上で考えていきたいと思います。

の管理職・役員の割合を2020年までに30%に拡大することを目標に²、3年間の育児休暇制度の整備や、男性を家事・子育てに参加しやすくするための「夕活」などを実施するなど、女性と男性とが子育てをしつつも、働きやすい社会制度の構築を目指すものである。

こうした社会的動きへの背景には、男性の働き方を基準とした職場環境が、子どもをもつ女性を働きにくくしている現状がある。たとえば、『ルポ・産ませない社会』において小林は、第一子出産後、女性の4割が「出産退職」し、その後7割が復職や転職をすることなく無職の状況になることを指摘した上で、その多くが核家族の上に、長時間労働で父親不在の「孤育て」をせざるを得ない状況にあるとする(小林2013:8)。実際に、6歳未満の子を持つ働く男性の家事・育児参加は、日本は1日平均1時間15分で、アメリカの3時間8分の3割弱の時間である(平成23年度版総務省「社会生活基本調査」)。また内閣府の国際比較調査によれば、「あなたの国は子育てし易いと思うか」という設問に対し、アメリカ人の4割が「とてもそう思う」と答え、「どちらかといえばそう思う」と併せて8割近くが肯定的である。しかし日本では「どちらかといえばそう思う」が4割弱いるものの、「どちらかといえばそう思わない」も4割弱存在し、「とてもそう思う」は1割未満にとどまっている(白波瀬2006:200)。このように、日本社会の子育てにおいては、父親と比べて母親が主にその役割を担い、また精神的肉体的負担を抱えるケースが多いようである。

では、日本とアメリカの子育て当事者としての個々の女性たちは、実際に自分にとっての子育てをどのようなものとして受け止めているのであろうか。本稿は、日本とアメリカとで実施された子供をもつ女性たちへの出産・育児体験のインタビュー・ナラティブをデータに、子を産み育てる当事者としての女性たちの体験的な語りの中に、子育てや家族観についての規範がいかにも表出するかを、言語人類学におけるディスコース分析の手法を用いて分析するものである。松木(1999)が指摘するように、言語人類学にはミクロな記号現象としての言語とマクロな歴史的・社会的状況とを結び付けるといふ課題がある(松木1999:772)。本稿の試みは、「いま、ここ」を生きる女性たちの声の中に、規範としてのマクロな社会的意識がどのように立ち現れるかを記述し、かつそれが言語文化によってどのように異なるかを実証的に分析するものである。本稿では特にインタビューというやりとりの場において、その場にはいない夫や家族の子育て関与や夫婦の関係性が、日英語それぞれの言語資源を拠り所に、いかにスタンスとして指標されるかを比較考察したい。

1. ディスコースとしてのナラティブ・インタビュー

本調査の目的は、日米で収録された日本語と英語によるインタビュー・ナラティブを、日英語それぞれのデータにみられる特徴的な言語資源の使用に着目して分析し、その比較考察の中から文化としての規範意識を読み解くことである。それに先立ち本節では、言語人類学の「ディスコース中心の文化論」(Discourse-Centered Approach to Culture)の枠組みを援用しながら、インタビュー・ナラティブを分析する理論的有義性について、先行研究を紹介しつつ概観することとする。

個人の特定の体験やライフヒストリーの分析に基づくナラティブアプローチは、文化人類学や民族学、社会学や心理学分野で長らく使われてきた研究手法である。そもそもインタビューは、ほかの手段では入手しづらい当事者の文化的理解について多くの手がかりを与えてくれる手法であり、また日常会話の延長線上にありながらも、普段は減多に話す機会のない事柄や事象が言語的に表象化される場所である³。こうした手法としてのインタビューは、特に1980年代以降、文化生成の場として注目され始めた「ディスコース」概念の中に組み込まれていく。「ディスコース中心の文化論」(Discourse-

² 平成26年度では11.3%である。

³ たとえば本研究のインタビュー協力者の中には、インタビューを振り返って「日常生活に追われてあまり思い出すことのなかったことを改めて考える機会になった」、「自分の育児に対する考えを再認識できた」、「言葉にしてみると自分はこんな風に思っていたのだと気づかされた」といった意見をフォローアップアンケートに記す人もいた。

Centered Approach to Culture) は言語人類学者の Sherzer や Urban らによって提言された概念である。彼らは、パナマのクナ族 (Sherzer 1987) やアマゾン先住民のショークレン族 (Urban 1991) の伝統的詩歌、儀礼場面での政治的レトリック、また遊戯的言い争いやことば遊びの研究を通し、ディスコースそのものが言語と文化の相対的な関係性、そして記号化された文化現象が具現化する場所であることを提言する。この考え方は、言語人類学の潮流において、文化を「媒体」や「実践」として捉える流れと相まって、ディスコースを文化的対象物そのものとして中心に据えて研究する流れを作り出した。こうしたディスコース中心の文化論は、ナラティブの研究領域においても影響を与え、「社会的行為者がどんな具体的な実践行為を通して特定の意味を創造するのかを描く」方法としても注目されるようになる (松木 1999: 760)。

ディスコース中心主義の見地からみたナラティブは、語りの産物として客体化される独立したテキストではなく、語り手が自らの経験の意味を、語りの場という「いま、ここ」において構築する意味生成のプロセスとして捉えられるようになる。たとえばインタビューという場において、その場への参加者は便宜上「話し手」(協力者)と「聞き手」(調査者)に分けられるが、語り手は目の前にいる特定のオーディエンス(調査者)を含むインタビューの場において話しをしているのであり (Duranti 1986)、時として笑い、うなずき、話を促し、評価をする対話者との共同作業の中に、新しい体験の意味が再構築されてゆくのである⁴。

こうしたナラティブについて、特に言語人類学や社会言語学の分野では、「何があったか」という語られる内容としての指示的意味内容のみならず、「どのように語るか」という非指示的レベルでの意味構築のプロセスを重視してきた (松木 1999: 760)。非指示的レベルでの意味とは、ナラティブの構造や語りの開始の手続き、聞き手との相互行為、語りの中の時系的配置などさまざまであるが、Quinn や Hill は、こうした非指示的レベルの語りに、文化的前提 (cultural presupposition) や、必ずしも話者が意識していない規範意識が明らかになるとする (Quinn 2005:14, Hill 2005: 157)。たとえば、Ochs and Taylor (1996) は、アメリカ中産階級家庭の夕食時の会話をデータに、ナラティブとしてのやりとりが家族間の関係性を明らかにすることを見出している。そこでは、子どもや妻の語るナラティブに対し、父親が主なる聞き手となると同時に批判と批評を下す役割を担う相互行為の過程から、日常的なナラティブの場においてジェンダーヒエラルキーとしての不均衡が再生産されることが明らかになった。また、インタビュー・ナラティブのデータ分析からイデオロギーとしてのメタ文化を明らかにした研究に Yamaguchi (2007) がある。Yamaguchi は、日本に生まれ幼少期にアメリカに移住した二十歳前後の若者のライフストーリーを、ディスコース中心の文化論、及び批判的談話研究の方法を組み合わせて分析する。特にナラティブ中に表出する一人称代名詞での叙述内容 (I-statements) を命題レベル、指標・相互行為レベルで分析し、そこに浮かび上がるメタディスコースとしての「成功話」(success story line) フレームを導き出している。

本稿もこうした流れを汲み、インタビュー・ナラティブにおいて文化としての言語が、文化的前提としての規範意識を指標し、呼び起こす過程を明らかにすることを目指す。その上で、本研究はまずインタビュー・ナラティブという場において、同じ質問をされた日本人女性とアメリカ人女性それぞれの談話を比較するという手法を取り、日本語と英語という異なる言語話者のナラティブを分析することとする。同時に日英語の語り手が用いる特徴的な語り方を、日本語データにおいては授受補助動詞と語られる対象の名詞化現象を中心に、英語データにおいては人称代名詞と談話標識とを中心に分析しながら、それぞれに指標される文化的前提としての子育てスタンスを明らかにすることを試みる。

⁴ たとえば本調査における協力者と筆者(調査者)は、1名を除いて初対面の相手であったが、互いに自己紹介をし、半構造化されたインタビューを実施する過程で、話し手のみならず、聞き手の体験談も時として共有される対話的な場であった。また、対話はインタビュー録画の最中だけでなく、その前後の世間話も含めたやりとりの文脈も含む。

2. データ収集と分析方法

本研究で使用されたデータは、もともと関東地方（東京、栃木、茨城）在住の日本人女性に出産・子育ての体験を聞く共同研究の一部として収集されたものである。筆者によるインタビュー調査は、2010年に茨城県つくば市にて日本人女性8名に対し、また2012年に米国アリゾナ州でアメリカ人女性4名に対し、アクティブインタビューの手法をもって実施されている。日米のインタビュー協力者は、調査者である筆者の知人を介して紹介された初対面の女性たちであり、インタビューは協力者の同意を得た上でビデオ録画されている。インタビューは1対1の形式で、協力者、調査者いずれかの自宅または大学研究室で実施され、短いもので40分、長くて100分程度であった⁵。またインタビュー後にはフォローアップ形式で協力者にアンケートを送り、インタビューの感想や追加質問に対する意見を書面にて収集した。

具体的なインタビュー内容は日米共通して主に次の6つと、それに関連する質問事項を中心に質問された。1. 出産はどのような経験だったか（回想）、2. 出産して周りの人の反応はどうだったか（回想）、3. 出産前後であなたは変わったか（評価）、4. 出産前と比べて夫は変わったか（評価）、5. 子どもの手が離れる頃、どのようになっていたか（展望・願望）、6. 理想の母親像はどのようなものか（展望・願望）。本稿では、主に3と4の質問に関連した語りの部分を中心に、話し手が育児の体験を振り返りながら、特に夫や家族への評価を、調査者である筆者に対してどのように表出しているかを談話レベルで分析する。表1は本稿でその談話がデータとして取り上げられたインタビュー協力者と調査実施についての一覧である⁶。

表1. インタビュー協力者と調査実施地・時期

協力者(仮名)	子どもの数	調査地	調査時期
サチ(30代)	1	茨城県つくば市	2010年8月
ミワ(30代)	2		
ケイ(30代)	1		
Bobby (40代)	3	アリゾナ州 フェニックス市近郊	2012年8月
Anna (50代)	3		
Chris (30代)	1		

本研究の調査はまず日本人へのインタビューが実施され、次いでアメリカ人に対して実施されている。次節ではまず日本語のデータの中から、女性たちの語りの中に頻出する授受補助動詞の利用と、語りの対象の名詞化現象を中心に分析する。続く4節では、アメリカ人女性との英語のインタビュー・ナラティブに特徴的であった人称代名詞の変化と談話標識 *but* の分析を通し、それを基点に浮かび上がるメタフレームについて考察する。

3. 日本語の語り—恩恵の授受補助動詞と名詞化現象

日本人とアメリカ人の女性たちに出産、育児の経験を語ってもらおうと、いずれの国においても出産、育児は大変なライフイベントで、出産時の会陰切開による体の痛みや産後鬱、また乳幼児を育てる上での環境の変化に伴う精神的肉体的負担などは、どちらの女性もが共通して体験したこととして語られていた。しかしたとえ語られる内容が似通っていたとしても、その語られ方の相違に異なるスタンスが表出するのではないかという前提のもと、本研究では聞き手である調査者が、夫の変化について尋ねた際の妻の語りを中心に、日英語談話の比較を行う。

首都圏と栃木県在住の日本人女性の出産・育児経験のナラティブに現れる授受補助動詞について分

⁵ インタビューは、時に協力者や調査者の子どもが周りにいる状況でも収録されている。

⁶ 協力者の名前は仮名であり、調査者は筆者（40代）である。

析を行った Okamoto (2008) にも指摘されるように、日本人女性の語りのデータでとりわけ特徴的なのが、話し手が自分の夫や親族、そしてその他の第三者（医者、友人など）について言及する際に頻出する授受補助動詞「テクレル」の多さである。サチの語りにまずその例を見てみよう。サチは、国の研究機関に勤める夫と未就学児の子ども一人との三人家族である。夏のある週末に実施されたこの調査では、サチの夫が子どもを公園に遊びに連れ出している間に、サチの自宅のキッチンテーブルでインタビュー調査が実施された。聞き手である筆者は夫婦の馴れ初め、出産体験、そしてサチ自身の変化について振り返ってもらってから、「ご主人はいかがですか？」と、父親となった夫の変化についてサチに尋ねている。尚、データの文字化のために使われる記号については、付録を参照されたい。

【データ 1：サチの語り】

- 01 イデ： ご主人はいかがですか あのう(.) M君(子どもの名前)生まれて
02 それでこういうところがあったんだ::とか
03 サチ： 旦那さんですか:(.) さっきも言ったんですけど子どもすっごい好きな人で
(中略)
09 ほんとに遊ぶの好きなんですよね(.) 遊んでくれるというか
10 で:: 为什么呢(.) 遊ぶの好きなんですよね(.)遊んでくれるというか

この質問が投げかけられる前の語りにおいて、サチは結婚前から夫が子ども好きであったことを、夫が友人の子どもと上手に遊んでいた思い出を引き合いに説明しているが、改めて父親になってからの夫について問われると、「子どもすっごい好きな人で」と、再び夫の子供好きについて言及する。その後の中略部分で、サチは夫と子供との自宅や外での遊びについて具体的に説明しつつ、「ほんとに楽しそうに」、「まるで子どもが二人いるみたい」などと夫の様子を描写すると、9行目で「ほんとに遊ぶの好きなんですよ、遊んでくれるというか」と言っている。ここでサチは、夫が子どもと遊ぶのが好きだという命題内容を、一度目で「遊ぶの好きなんですよ」と、聞き手に説明をする形式で言及している。しかしながら、直後にサチは、その表現を「遊んでくれるというか」と、授受補助動詞の「テクレル」を付けた表現で、まるで言い直すかの如くくり返している。

授受表現の「くれる」を補助動詞として使うこの用法は、ある行為について話し手が恩恵を受けていることを指標する受益表現である。そのため、「遊ぶの好きなんですよ」と「遊んでくれる」とは、「夫が子どもと遊ぶ」という同じ状況説明でありつつも、後者には、その夫の行為の直接的恩恵・利益を話し手が受けているとする視点が指標される。さらに、「くれる」は「あげる」に比べ、物や行為が身内ではないヨソの領域から、話者を含めた身内としてのウチへと移動したことによる恩恵を認める表現である(任・井出 2006:158)。そのため、話し手であるサチと、実際に遊んでもらう対象としての子どもとは、互いにウチ関係にあることがここに指標され、さらに夫の行為によってもたらされた恩恵を謝意として受け止めていることが間接的に指標されると言える。「遊ぶ」とするか「遊んでくれる」とするかは、ほとんど無意識による選択であろう。しかし「遊ぶの好きなんですよ、遊んでくれるというか」と、「テクレル」がない形とある形での説明を二度にわたってくり返すサチの語りには、夫の性格そのものを説明せんとする動きと共に、インタビューという相互行為の場において、夫の行為を受益として受け止める話し手の視点を聞き手と共有せんとする、二つの事象の捉え方が見て取れる。

夫について語る際の授受補助動詞の使用は、次のミワのデータにも明らかである。データ 2 のゴシック体部分に示されるように、夫の変化を問われた際のミワの語りには、夫についての説明や夫の行為が授受補助動詞の「テクレル」を伴う形で表出している(5、10、12、16行目)。

【データ 2：ミワの語り】

- 01 イデ： あれですかご主人は:あのパパになられて::こう変わったところとか
02 (0.4)なんか::

- 03 ミワ: あ:
 04 イデ: その=
 05 ミワ: =あの変わったというかあ-(1.0)こんなに(.)協力してくれる人だったんだ[::
 06 イデ: [う:ん
 07 ミワ: あ(0.2)もともと:hhすごく@性格がいい@ってhhいうかま自分で言うのも
 08 [なんですけど
 09 イデ: [う:んうんうん
 10 ミワ: 性格もよくなってすごく助けてくれる人だったんですけど::=
 11 イデ: =うん
 12 ミワ: こんなに:やってくれるんだっていうのが単純な-単純な(.)率直な感想で[::(中略)
 13 イデ: [え:え:え:
 14 ミワ: 妊娠してつわりが始まってからは:なぜか出産前-あ:出勤前の朝の(.)掃除機(.)かけは
 15 彼の仕事になって今もそうなんですよね(.)で:今も(.)さっきもお話したとおり(.)六時
 16 に帰ってきて(.)一緒にご飯を食べてお風呂にも(.)入れてくれるんで[::それだけでも
 17 全然なんか日々の(.)す-一人の時間が少しでもできるのでくお風呂に子どもたちが
 18 入ってる間一緒に(.)ありがたいですね::

インタビュー当時、ミワは二人の未就学児を育てる育児真最中の専業主婦であったが、出産後夫が変わったかという問いかけに対し、「こんなに協力してくれる人だったんだ」という、自身の「発見」を通して夫を評している(5行目)。続く7-8行目でのミワは、「自分で言うのもなんですけど」と断りを入れつつ、もともと「すごく性格がいい」と身内としての夫を褒めている。別の協力者であるケイも、自分の夫について、「もともとすごく優しい、って自分から言うのもあれなんですけど」とインタビュー内で語っているが、この「自分で言うのもなんだが」というメタ語用論的な発言は、ヨソ様の前で身内を褒めるべきではないという規範意識を話し手自らがわかまえていたことを指標する⁶。ミワによる夫への褒めとしての肯定的な評価は、笑い声を伴い緩和されて発話されているが、10行目でミワは、さらに夫を以前から「すごく助けてくれる人」だったと評する。ここでミワは授受補助動詞の「テクレル」を用いているが、それは自らが夫のその行為を有難く受け止めていることを指標している。その上でミワは、父親となった夫のことを「こんなにやってくれるんだ」(12行目)という驚きを含んだ発見として叙述するが、そこには同時に、そもそも夫や男というカテゴリーに属する者は、家事や育児を「やらないもの」という前提的な認識が見え隠れする。さらにミワの語りにおける夫への評価は、「こんなに協力してくれる」(5行目)、「すごく助けてくれる」(10行目)、「こんなにやってくれる」(12行目)にあるように、「こんなに」、「すごく」などPomerantz(1986)の言うExtreme Case Formulationsを用いてその説明が正当化されている。一方その後の14行目以降は、より具体的な活動描写をもって、夫の協力や助けについて説明がされる。その中でも、「一緒にご飯も食べて、お風呂にも入れてくれるんで」などと文末には授受補助動詞が使われ、話し手が、夫の行動を自らへの恩恵として受け止めていることがここでも指標されている。さらにミワはこうした夫の行動により自分だけの時間が少しでもできることを、「ありがたい」という明示的な相手への謝意をもってまとめている(18行目)。

語りにおいてその場にはいない夫への恩恵を指標する授受補助動詞を、次にケイの語りに見てみたい。一児の育児をしているケイは、データ3に至る前のインタビュー部分で、住んでいる公務員住宅から夫の勤務先が近いこと、会社が男女共同参画を推進していること、また夫の勤務体系がフレックス制度を利用したものであることを説明する⁷。そして「まあ、この会社じゃなければ絶対無理だろう

⁶ 一方、英語データの夫への褒めには、こうしたメタ語用論的なコメントは出てこなかった。

⁷ ミワとケイの夫の勤務先では、夕食時に一端帰宅し、その後21時くらいから再び会社に戻って仕事ができるフレックス制度を導入している。

なって思ってしまうので、ありがたいのかな」と感謝の意を表明しつつ、子どもが生まれてからの夫を「家族一番で、まあ考えてくれている感じがしますね」と振り返っている。データ3は、ケイが夫の在宅時間について子どもが生まれて以後、極端に変わったことを説明する語りに続く箇所である。ここでケイは、夫の出勤時間が遅い時には10時くらいになることから、毎朝子どもが幼稚園に行く際に、夫婦で見送りに出られることを説明する。

【データ3：ケイの語り】

- 01 ケイ： はい(.)はいみんなで[.]バス停まで送ってあげられるんで
02 イデ： [あ：そうなんですか(.)うんうんうん
03 ケイ： なので私も:(0.4)う::ん(.)ストレス[は
04 イデ： [うん
05 ケイ： 実はあんまり[ないですね
06 イデ： [うんうんうん
07 ケイ： かなり動いてくれるんですね=
08 イデ： =うんうんうん
09 ケイ： うん子どもの世話も頼むと(.)率先してやってくれたり(0.2)はじめ
10 (0.4)家事も(.)自分のことも何も出来ない人だったのが:=
11 イデ： =ええ
12 ケイ： (0.6)ん::結婚してからなんですけれど徐々にお問い合わせしてできるよう
13 になってきて[で子どもが生まれたら子どもの世話も(0.2)しっかり
14 イデ： [うんうんうん
15 ケイ： できるようになっているので::=
16 イデ： =う:ん
17 ケイ： かなり(0.2)手伝ってくれるお父さんな-はず(.)[です(.)が:::
18 イデ： [う::んうんうんうん
19 ケイ： それに慣れてしまうと私ももっともっとにh@なって@しまうんで
20 hだめなんですけど(1.0)うん(0.6)よくやってくれている[で

3-5行目においてケイは、子育てについてのストレスが「実はあまりない」と率直に感想を述べているが、その理由として夫が「かなり動いてくれる」(7行目)こと、また頼めば子供の世話を「率先してやってくれる」(9行目)ことを、授受補助動詞を用い、自らへの恩恵を指標する表現を用いて説明する。また10行目では、かつて夫が「家事も自分のことも何も出来ない人」であったのが、結婚してから徐々に変わってきたその変化の様子を説明している。そして、それを踏まえて「変化」してきた夫を、「かなり手伝ってくれるお父さんはず」(17行目)であると評している。

データ2、またデータ3の語りにおいても、夫についての説明は、語り手である女性たちの視点からみた授受補助動詞の「テクレル」を利用した形で表れている。「テクレル」での表現は、前述のように、自分を含めたウチ領域への物や行為の移動を指標することから、たとえば「お風呂にも入れてくれる」という表現は、お風呂に入れるという行為の直接的対象者である子どもを、自らの領域に存在するとみなしていることを明示化する。またデータ2とデータ3の授受補助動詞の利用をみると、「テクレル」が付けられる本動詞は「協力する」、「助ける」、「手伝う」などであり、こうした動詞の利用からも、日本語の語りにおいては、子育てが主に女性の領域にあり、あくまでも夫はその領域に補助的な立場として参入する構図が浮き彫りになってくる。

さらに興味深い点として、データ2、3のいずれにおいても夫への言及が、授受補助動詞を伴う名詞化した形で表れることが挙げられる。データ2の「こんなに協力してくれる人」(5行目)、「助けてくれる人」(10行目)、データ3の「手伝ってくれるお父さん」(17行目)がその例である。ここにみえる名詞化された夫たちは、「XはYである」という夫を主語とした叙述文ではなく、妻の視点からみた

夫を、特定の社会的成員カテゴリーの中に位置づけた描写の仕方であると言えよう (Sacks 1972)。つまり、世間一般でいうところの「手伝う/協力する夫」vs「手伝わない/協力しない夫」という二極スケールの中に、自分の夫を位置づけ、評価しているのである。Yamaguchi (2014) に指摘されるように、文化的な概念としてのプロトタイプは、共有されていることが仮定されるもの (presumptively shared) として、ディスコースとしての言語使用に指標され、呼び起こされるものである (2014:225)。ここでのケイによる「かなり手伝ってくれるお父さんなはずです」という発話は、夫の「手伝う」行為に対しての自身への恩恵を指標するだけでなく、世間一般に共有される抽象的概念としての「男性・父親」というカテゴリーに照らし合わせつつ、自分の夫を位置づけ評価する発言だということができよう。日本人女性のインタビューデータには、ほかにも夫を「よくやってくれる方だと思う」、「どっちかっていうと協力してくれる方」といった評価方法が散見された。こうした夫への評価は、「テクレル」を用いて、当該の自体が当事者としての女性にとって好ましいことを指標すると同時に、個人としての夫について、世間の規範的な男性像に照らし合わせて評価していることが見て取れるだろう。小宮 (2007:120) は我々が社会生活を営むことの中に、本質的に規範が含まれているとするが、インタビューという准公的な場面において使われる記号的な言語使用の中に、社会規範としての母親、父親の子育てへの関わり方が映し出されていると言えるだろう。

4. 英語の語り一人称代名詞とメタフレーム

翻って英語の語りについてはどうだろうか。日本語とは異なる言語である英語には、日本語のような文法化された授受補助動詞は存在しない。その代わりに、アメリカ人の女性たちとインタビューをしていて度々起きたこととして、筆者の質問に対し、協力者の用いる人称代名詞が変化するという現象があった。

たとえば、ほぼ年子で三人の子供を授かった Bobby は、産後の思い出を振り返り、第一子出産後の当時、体調の悪く24時間で退院を命じられたことや、産後鬱にかかった際の大変さを一人称の I の視点から時系列に沿って述べていた。そして三人の子供たちが幼かった子育ての繁忙期には、実母や近所の人、ベビーシッター、そして当時一時的に職場から解雇されていた夫が子どもたちの面倒を見ていた状況を説明する。次に筆者が「子どもが生まれてからあなたは、そしてあなたの生活は変わったか」(Do you think- how did you, you change, or your life change after having kids?) と質問をした際、Bobby は次のように回答を始めている。

Well, you didn't have much freedom. You know, to just go out and do things and we probably liked to always, like my husband and I, we always liked to go watch like a band.

ここでの Bobby は、まず二人称の you を用いて話を一般化した上で、子どもが生まれると「自由がなくなる」ことについて述べている。続いてその自由について「出かけて何かすること」(go out and do things) と説明するが、その後に使われる人称詞は、その前の談話で継続して使っていた I、また直前での you から we へと変化している。Bobby は we の指示対象が「夫と自分」(my husband and I) であることを明示化した上で、we としての夫婦を主語に、子どもが生まれる前に好きだったバンド演奏にあまり出かけられなくなったことを語っている。このしばらく後、筆者が Bobby に子供たちとの関係性について尋ねた際 (what do you like about your relationship with your children right now?)、Bobby は “Is it just me? Just me or my husband?” と、筆者の質問が Bobby 本人の答えを求めているのか、それとも親としての夫の立場にも言及すべきなのかを確認している。筆者はこの時、目の前にいるインタビュー協力者の Bobby について意見を求めていたのだが、その後 Bobby はこの質問に対し、「夫婦」としての we の立場から子どもたちとの良好な関係性について説明している。

人称代名詞は、その語りの文脈においてのみ理解が可能な指標性の高い言語資源であるが、英語のインタビュー・ナラティブでは、Bobby と筆者のやりとりにもみられるように、語り手の使う人称詞が

変化する視点の取り方の変化がみられた。こうした人称詞の変化は、文や節レベルのみでなく、より大きなディスコースレベルにおいて語りのメタフレームを構成するようである。その例を次の Anna の語りにみてみたい。

20代で子ども三人（第一子は養子）の母親になった Anna は、インタビュー冒頭部分⁸で自らを専業主婦（stay-at-home mom）と紹介する50代の女性である。次は子どもたちが幼かった頃の思い出を振り返ってもらった際の Anna の語りである。データ4、5、6は、協力者と調査者である筆者との相互行為として会話分析の手法で文字化したものを、本稿のディスコース分析のために配置し直したものである。データは通常の談話資料のように、左から右へ、上から下へと読まれるものであるが、本分析のために、敢えて「一人称代名詞のIで始まる発話群」を右列に、「その他の人称代名詞（you, we, he, they など）で始まる発話群」を左側に配して記載した。その際、人称代名詞は強調のために太字で記してある。また聞き手である筆者によるあいづちや評価などは、主だったものだけを[]内に表示し、その他の顔きや“uh-huh”といった反応詞は省略してある。データ4は、筆者が三人の子育て中に助けがあったのか、また大変だった思い出は何か（“Did you get a lot of support or do you have any episodes that you remember when your children were young that you felt like this is difficult raising a kid?”）を尋ねた直後からの Anna の語りであるが、全体的に早口に20行目までが一気に語られている。

【データ4：Anna の語り】

01	very much so	
02	that stay at home mom is not an easy deal	I think > I probably had< some depression ↑
03	you get so house-bound (.)	I know I did (.)
04		and uh- (.) I wish- I should have gone out more and (.) um
05		you know (.) made time for myself
06		<u>but that just ju-</u> I was just home with those babies and
07		<u>it was</u> hard [yeah] it was tough
08	we had a lot of family in town	
09	Carl's family was there so there were lots of cousins [uh-huh]	
10	and grandparents in town [uh-huh]	
11	both sets of grandparents (.)	
12	so (.) a wonderful family unit ↑	BUT I remember my mom (.) coming over one day (.)
13		and handing me fifty one dollar bills
14		[fifty ↓] fifty [one dollar bills]
15		bills and she said
16		I want you to use this for babysitter (0.2) [?oh?]
17		I want you to get out >and oh you go and do things<
18		and hu- (.) so I was () you know
19		I (.) respect <u>those women</u> who stayed home
20		>because it <u>is</u> it's hard< and I know now

Anna は20代で三児の母親になったのであるが、子育てが大変だったかを聞かれ、すぐさまそれを肯定すると、「専業主婦は簡単なことではない」(stay-at-home mom is not an easy deal) と一般論として専業主婦の大変さについて言及する。次に“I think ~”と、一人称単数代名詞を用いて自分自身が鬱状態にあったことを説明する（2行目）。3行目では、人称代名詞が2行目の一人称単数から、二

⁸ インタビューでは、主要な質問に入る前に、協力者の生い立ち、職歴、今の配偶者との出会いと結婚の経緯などを簡単に聞いている。

人称の *you* に戻り、一般的に専業主婦が家に拘束されがちであることを説明するが、その直後では再度一人称単数の *I* を用い、自分もその例に漏れなかったとしている (*I know I did*)。4行目からは、そうした自分の経験を回顧して、「もっと出掛ければよかった」と後悔の念を滲ませながら、その頃の印象を総称して、「大変で辛かった」(7行目: *it was hard, it was tough*) と述べている。7行目までの *Anna* の語りは、自分自身を「専業主婦」という一般化したカテゴリーの中に位置づけつつも、“*I think*”, “*I know*”, “*I wish*” と、一人称単数を用いて個人の考えや回想を列挙しつつ、それが総じて「辛い経験」だったとしている。しかし、続く8行目で、*Anna* の語りの人称詞は、突如 *I* から *we* へと変化する。

8行目以降で *Anna* は、当時町に親族 (*family*) が多くいたことを説明するが、8行目で用いられる一人称複数形の *we* は、夫婦としての自身と夫を指していると考えられる。9行目から12行目前半までは、その親族の多さの具体的な説明になっているが、夫 (*Carl*) の両親や従兄弟たち、また自身の両親も近くにいたことが肯定的な評価 (11行目: *a wonderful family unit*) をもって叙述される。しかしその直後 (12行目) で、*Anna* の語りには談話標識の *but* が入り、語りは再び *I* で始まる叙述文へと変化する。12行目後半からの語りは、ある日 *Anna* の母親がやってきて彼女に1ドル札を50枚手渡すと、それでベビーシッターを雇うようにお願いしたエピソードの回想である。この部分は、ナラティブの中にスモールストーリーが入れ子型に挿入される形になっているが、16、17行目において、“*I want you to*” というフレーズが二回くり返されながら、強い願望を映した母親の声が直接引用されている。このスモールストーリー部分は、*but* 以前の「すぐ近くに住む素晴らしい親族」とは対照的に、*Anna* 自身は家に拘束されて閉じこもりがちであったという冒頭の説明を、より具体的に強調して説明する機能をもっている。その後の19行目で、*Anna* は「家にいる専業主婦たちを尊敬する」と自身の意見を述べ、2行目で述べた一般論としての意見を、再度自分自身の考えとして表明すると、それが「大変である」(20行目: *because it is hard*) と、7行目の評価をくり返す形で語りをまとめている (矢印で結ばれた部分)。

データ4の *Anna* の語りを人称代名詞に注目して追っていくと、データの右側に記載される自分自身 (*I*) の直接的体験や感情に関する語りと、自身をも含めた家族 (*we*) についての語り部分で、異なる評価が行われていることが見て取れる。その際、*Anna* の語りは談話標識の *but* を契機に談話の人称詞が変化している。ディスコースマーカーとしての談話標識は、話し手が今述べていることと、すでに述べたことの結びつきを示すことにより談話の構成を明らかにする語や表現のことを指す。英語ナラティブにおける談話標識の機能を分析した *Norrick* (2001) は、語り手による *but* が談話内で語りの対称性を明示するだけでなく、たとえばナラティブが横道にそれた際には、もとの語りの流れに戻すきっかけに使われることを指摘する。また談話標識の *well* と同様、*but* が語りの導入 (*abstract*) から方向付け (*orientation*)、そして出来事の展開部 (*complication*) から結果 (*resolution*)、そして締めくくり (*coda*) への展開をスムーズにする機能があるとする (*Norrick* 2001: 866)。データ4でもこのような語りの展開表示とともに、*but* の前後で肯定的な評価と否定的な評価が表れる意味的対称性が見て取れるが、次のデータ5ではその対称性がより顕著に表れる。

データ5は、筆者が *Anna* に対し、彼女の夫である *Carl* が父親になってから変わったか (*what about Carl? Did he change or after becoming a dad?*) 尋ねた直後からの *Anna* の語りである。ここでも、データ4同様、筆者が頻繁に打つあいづちや反応詞 (*reactive token*) は、主だった強調的反応詞 (8行目) や先取りの発話 (11行目) などを残すに留め、それ以外は省略してある。

【データ 5 : Anna の語り】

01 Carl was a wonderful dad
 02 he worked full-time so (.)
 03 >he was home around the weekends ↑ < um
 04 the kids just- you know (.) of course adored him
 05 and followed him around
 06 and mowing the grass with their daddy (.)
 07 and he was a volunteer fireman
 08 so they got to see the fire:trucks [ah-@huh: ↑ @]
 09 OH (.) you know wonderful stuff (0.2) BUT um but I ↑ was pretty much
 10 I did all ↑ the house work and the baby taking care of
 11 cause he- you know he did work [doing the la:undry] yeah all-all of that
 12 and babies [babies] babies at night (.) so (0.4)
 13 there is always a little resentment
 14 always goes with that after a while that-
 15 that's (.) what you're doing BUT uh (0.2)
 16 no wonderful father
 17 hands on
 18 would change diapers
 19 feed babies (0.2)
 20 oh yeah [um::] yeah- much more involved than (.) my father was so. [I see]

筆者に夫の変化を聞かれた Anna は、Carl を主語とした叙述で、まず Carl が素晴らしい父親 (wonderful father) であったと評し、その後三人称代名詞の he を用いて彼が平日は正規に働き、週末を子供たちと過ごしていた状況を説明する。8 行目までに渡っては、子どもたち (the kids) が夫の Carl を追い掛け回し、一緒に芝刈りし、また地域の消防団員だった父親に消防車を見せてもらうなどの具体的な描写で夫と子供たちの良好な関係性が想起される。また 6 行目では“their daddy”という表現を用いて、子どもたちの視点からの夫が語られるなど、8 行目までの説明は父と子の良好な関係性のみが語られ、9 行目に再び「素晴らしいこと」(wonderful stuff) という肯定的評価で締めくくられている。しかし 0.2 秒の間をおいた後の Anna の語りは、談話標識の *but* を軸に、I を主語に置く談話へと転換する。“I was pretty much”からの Anna の語りは、夫と子どもたちの楽しそうで「素晴らしい」関係性とは対照的に、夫が仕事に出ている間の家事と育児とをすべて担っていた状況の説明である。9 行目の *but* 直後から 11 行目にかけての発話は、その前の発話に比べて Anna の語り声のトーンが明らかに一段高くなっており、メタ言語レベルにおいてもここでフレームシフト (Tannen 1993) が起きていることが示されている。家事・育児のすべてをやっていたという Anna の説明に、11 行目では聞き手である筆者が、Anna の語りを先取りし、補足するような形で「洗濯したり」(doing laundry) と反応詞を挿入しているが、12 行目の Anna はそれらすべてを自分がしていたこととして振り返ると、その頃、夫に対して抱えていたちょっとした憤りの気持ちがここで初めて明らかになる (13 行目: there is always a little resentment)。データ右側の I の語りの部分で、Anna は自分が抱いた夫に対する苛立ちを表明することにより、間接的に夫に対する否定的評価を行っているわけだが、その否定的な評価は、15 行目の *but* をきっかけに、再び肯定的な評価へと戻ってくる。16 行目での Anna は、まるで前述の言葉を取り消すかのように“no”と言うと、1 行目と 9 行目で用いた wonderful という表現を再び用いて父親の Carl を評価すると、「実践的で／おむつ替えもし／食べさせる」(17～19 行目) という具体的な説明をもって、「自分自身の父親よりもよっぽど子育てをしていた」と、親世代との比較を引き合いに夫を肯定的に評価する方向に落ち着いている。

ここでデータ 4 とデータ 5 における Anna の語りの右側部分を、I を主語とした文が司る <I 領域>

左側の語りを we, he, they などの人称詞に導かれる〈Family 領域〉として分析を進めることにしたい。データ4では自身の子育ての経験を振り返りつつ、〈I 領域〉においては大変で辛かった語り手自身の経験が語られているのに対し、*but* を軸に展開する〈Family 領域〉では、wonderful と形容される肯定的評価が、対を成すように立ち現れてくる。この〈I 領域〉と〈Family 領域〉の対比的な展開は、データ5にも同様にみられる。〈Family 領域〉においては夫についての評価が相対的に高いのに対し、*but* 以降の〈I 領域〉では、実際に語り手自身が体験した出来事やその時の感情が回想され、必ずしも肯定的でない感情(憤り)が表出する。このように、Anna の語りは、メタフレームとしての「家族」と「個人」の二つの領域の間を行き来しながら、〈Family 領域〉においては、自身を含めた家族の状況説明が肯定的に語られるのに対し、〈I 領域〉においては、より個人的な回想、感情や願望の表出が行われ、「孤独」や「辛さ」といった負の体験について言及されている。

メタフレームとしての二つの領域が *but* をきっかけに立ち上がる展開は、インタビュー当時3歳になる息子の子育てをしつつ、美容師として週に三日職場に出ていた Chris の語りにも見て取れる。以下の抜粋部は、筆者が「父親になってから夫が変わったかどうか」について尋ねた直後からの語りであるが、まず Chris は夫について三人称代名詞の he で語りを始める。ここでは、「彼が」常に「辛抱強く」(patient)、それほどでもない自分と比べると (“I’m not so much”), それが「良いこと」(3、5行目:nice)であると肯定的な評価を下している。しかし5行目の *but* 以降では、「男性としてみると」という断りを入れつつ、“I definitely think~”と I を主語とした自分自身の意見として、夫が「それほど辛抱強くない」(his patience is thin)と説明している。2行目で夫が辛抱強いと言ったばかりの Chris の発話は、前述と矛盾するようにも思えるが、5行目までの夫像は「人」としての彼であり、そこから16行目に渡る語りは、「女性」としての Chris の立場から見た、「男性」そして「男親」としての夫の評価である。

【データ6:Chrisの語り】

01 uhmm(.)
 02 yeah **he's** always been (0.1) pa:tient(.)
 03 which is so **nice** because I'm not so @much@ hah ↑
 04 and he's um (0.2)
 05 so that was **nice**(.) BUT(.) as a **MA:le**(.) [yeah] I definitely think(.) **his patience**(.) is thin ↑ uh
 06 hahahahahahh [hahhhhh(.)] uh huh
 07 when it comes to kids especially
 08 when I was at work and he was(.) little (though)
 09 you know he would call me(.) or I'd be like(.)
 10 ↑ did you put Matthew down to bed?
 11 ↑ OH: ↑ NO: he's fine(.) you know
 12 he was just more relaxed and I am just more-
 13 >no Matthew needs to go to bed you know<
 14 no he's fine he's drink- you know he just had his
 15 bottle: and but: if Matthew was crying
 16 he didn't know how to- **his patience is kind of thin**(.) but(.) um

上のデータにみるように、〈Family 領域〉で語られる夫には“nice”という肯定的評価が下される(矢印参照)一方、5行目の *but* 以降の〈I 領域〉での夫の評価は、母親としての語り手の視点から、「父親としての夫」を評するものになっている。ここで Chris は子育てに関して夫があまり忍耐強くないことを、子どもが小さかった頃の夫婦のやりとりを創造ダイアログ(Tannen 1995)の形で再現しつつ説明する。8行目からの Chris は、自身が仕事をしている間、自宅で子どもをみていた夫との電話でのやりとりを、直接引用の形式で再現するが、「子どもを寝かしつけたか」(10行目)と確認

する自分に対する夫ののんびりした対応を、少し間の抜けた、ゆったりとした口調で再現する（11行目）。さらに13-14行目でも、決まった時間に子どもを寝かせたい自分（母親）とは対照的に、「大丈夫だから」（no, he's fine）とあわてる様子もなく呑気な夫の姿が創作ダイアログの形で語られる。そして最終的に16行目では、子どもがひとたび泣き出すと、「どうすればよいかわからなくなる」（he did not know）という説明とともに、夫があまり子育てに関して忍耐強くない（“patience is thin”）と再び評価をまとめている。

データ4、5、6に見てきたように、アメリカ人女性へのインタビューに表出する子育て期の経験や夫への評価は、he, we, they などの人称詞で語られる〈Family 領域〉においては、wonderful, nice といった肯定的評価で自身を含めた家族が表向きは良い形で語られる。それに対し、談話標識の *but* を軸に展開する一人称代名詞の〈I 領域〉では、個人の体験や感情が、時に直接引用や創造ダイアログの形をもって、より具体的かつ直接的に描写されているように見受けられる。そしてその内容は必ずしも素晴らしいものではなく、現実の出産・育児の苦労や、夫と自分との異なる体験が、時に直接引用をもって語られている。このように、英語データの分析からは、人称代名詞の使い方が談話標識の *but* を軸に展開する語りのメタフレームを作り出しており、その二つの領域を行き来する形で、経験が語られていることが見て取れるだろう。

5. 子育てへのスタンスの日米比較

本稿は日本人とアメリカ人女性とに対して行われた出産、育児に関するインタビュー・ナラティブから、日本語と英語でのナラティブの「語られ方」の違いを、日本語では授受補助動詞と名詞化現象を、そして英語では人称代名詞と談話標識の利用を中心に分析してきた。ここで改めて、日英語のデータ分析から導き出される女性たちの子育てへのスタンスの相違を比較してみたい。

まず日本人の女性たちの語りとしての日本語データには、英語にみられるような談話標識の *but* を軸として展開するメタフレームは出てこない。そもそも日本語には人称代名詞がなく、自称詞・他称詞が用いられる。また、相互行為の場としてのコンテキストから言及内容が理解されるため、主語や目的語が明文化されることは欧米諸語だけでなく、韓国語のような文法の類似する言語に比べても非常に少ない。データ2のミワの語りもそれに漏れず、聞き手である筆者が「ご主人は、あのパパになられて」と質問をしたのを受けて、3行目から回答を始めているが、その中で「主人」「夫」「彼」といったような夫を称する言葉が出てくるのは、15行目で使われる「彼の仕事」の所有格一つだけである。そのため、日本語データには英語データにみられたような人称代名詞によって区分されるメタフレームは見取れない。しかしながら夫について言及する日本語データのあちらこちらに付与される恩恵の授受動詞の表現から、語りの視点が一貫して母親である女性たちの側に据えられた上で子育てが語られていると言いうことができるだろう。一方で英語のデータでは、談話標識 *but* を契機としてフレームシフトが行われ、特に語り手の用いる人称代名詞の利用から、I を用いた〈I 領域〉と、we, he などを用いた〈Family 領域〉というメタフレームが浮かび上がる。同時に、〈Family 領域〉においては、自身をも含めた夫や家族が、肯定的なスタンスで語られる一方で、そこから反転するかのよう〈I 領域〉においては、個人の内面としての感情や体験が、直接引用を用いたスモールストーリーの形式で表れ、その領域においては否定的な評価も表出することが見て取れた。

データ分析の結果から日米の女性たちが抱く子育てへの認識をそれぞれに図式化したものが次の図1、及び図2である。

図1. 日本語の語りにみる子育てスタンス

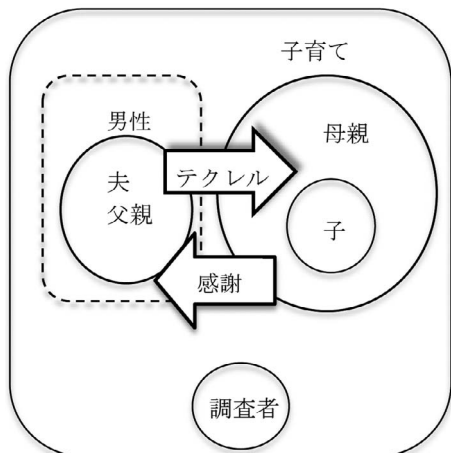
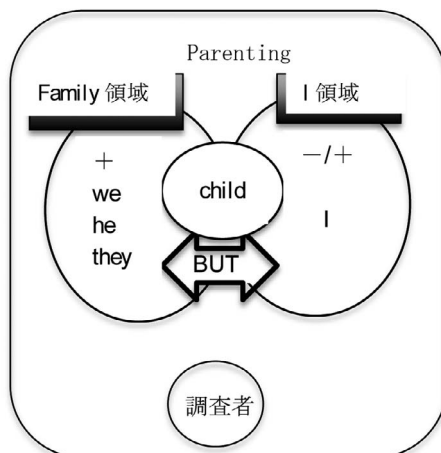


図2 英語の語りにみる子育てスタンス



ここで二つの図を参照しつつ、日米の女性たちによる子育てスタンスへの異なりについて考察したい。女性たちへのインタビュー談話から見て取れるのは、まず子育ての主体の異なりである。話し手としての協力者と聞き手である調査者が存在するインタビュー・ナラティブという場において、図1にある日本人の語りでは、ほぼ一貫して「母親」の視点から子育てが語られていた⁹。これは、前述のように、「テクレル」としての授受補助動詞を用いることで、女性たち自らへの、そして子どもに対しての恩恵や利益を指標する行為の移動方向から明らかであった。またこの恩恵の授受補助動詞の利用から、子どもが母親のウチ領域に位置づけられて語られていることも明らかになった。さらに夫の「テクレル」行為に対して、話し手は「ありがたい」といった感謝の気持ちを明確に表現しており、そこに子育ての主体が母親にあるという認識が見て取れる。一方で、図2にみるアメリカ人女性の語りでは、語りの主体は主語としての人称代名詞の変化を伴い、自分や夫を含めた家族と個人という二つの視点を行き来して語られる傾向にある。このことは一般的な子育てが、英語で“parenting”とも呼ばれるように、「夫婦」を単位とする“parents”が主体となったアメリカ社会での子育て意識を反映していると考えられる。そのため英語のデータでは、夫や家族を肯定的に評価し、褒める言及は見られたものの、日本語データにみられたように妻が夫や家族に対して「ありがたい」と、明確な謝意を表明するケースは本研究では見られなかった。

次に指摘できる日米の子育てスタンスの異なりとして、妻と夫との関係性が挙げられる。図1のように、日本語データでは、夫について言及する際に用いられる名詞化現象から、夫が「男性」という社会的カテゴリーの中に位置づけられ、また子育て主体である女性・母親の領域に副次的に参画していくという関係性においての「変化」が見て取れる。このように、日本語の語りからは、母親が子育ての中核的役割を担い、夫がそこに参与するという役割の異なりが、母親自身の語り方から浮き彫りにされる¹⁰。一方で、アメリカ人の語りにおいては、図2のように、〈Family 領域〉での語り肯定的評価(+)を含むのに対し、〈I 領域〉での語りでは、それがたとえ同じ出来事の説明であっても、より否定的な評価(-)として現れやすくなっている。このことは、筆者である聞き手の存在するインタビューという場において、話し手が〈Family 領域〉では、理想的な家族像を公的(public)に提示するフレームとなる一方で、個人的な経験や感情は、より私的(private)な領域で提示されることも

⁹ 日本人データの8名のうちの1名だけは、子育てに関する談話において「うちは～です」などと「うち」という表現を頻繁に使い、夫婦単位で育児を行っていること印象付ける話し方をしていた。

¹⁰ 本稿では取り上げなかったが、ある日本人協力者は、自身の夫が子どものことをかわいがりながらも自分自身のことも妻に構って欲しいタイプであると説明しつつ、「私としてはもうちょっと、なんか一緒にこう子育てに入ってほしいんですけど」と今の気持ちを説明していた。この子育てに「入ってほしい」という比喩的な表現にも、夫が子育て領域の外側に位置していることが認識的に示されているだろう。

意味するだろう。さらに図1と図2においては、語りの場としての枠組みの中に、聞き手としての筆者（調査者）の姿が記してある。話し手としての協力者と聞き手としての筆者の相互行為の中で行われるインタビュー・ナラティブは、協力者と調査者とが互いに社会的規範を確認し合い、共有する場としても働く。日本人女性のナラティブに現れる「夫・父親」像は、「子育ては女性がするもの」という社会規範を内包する形で立ち現れ、子育ての主体があくまでも女性の側にあり、父親はその女性たちを手伝い、サポートする存在として、その場の参与者たちに共有された前提であることを映し出す。また一方で、アメリカ人女性たちの語りに現れる異なるフレーム間での語りの揺れは、「夫婦」や「家族」で子育てをするというアメリカ社会の理想的家族像を映し出しつつも、実際には当事者の女性たちが子育てにおいてさまざまな苦勞をしている現実をもその場の参与者に伝えうる技法なのであろう。

おわりに

日本は女性が子育てをしやすい社会なのであろうか。たとえばこうした社会的な問題意識に対し、さまざまな見地からの研究が盛んに実施されている。子育てのしにくさや子どもの産みにくさという社会的現象は、たとえば日本の三歳児神話に代表される妻・母の家庭責任意識へのこだわり（中川2010）や、日本社会での「夫は外で働き妻は家庭を守る」という性別役割分業体制の構造的安定（笹川他2015）などからも明らかにされており、本稿の分析結果もそれを支持するという見方もできる。笹川他（2015）のように、社会の変化や規範意識を明らかにする上で昨今インタビュー調査の手法が積極的に活用されているが、本稿がとるディスコース中心の文化論は、話し手の語りには直接的に表出しない子育てへの規範意識と言語資源との関係性についても明らかにするものである。言語人類学者のHill（2005）が言うように、「ディスコースはインターアクションにおいて文化が具現化し、生成される、まさにその場所」である（2005:159）。本稿でみた一人一人の女性たちの声は、社会関係から孤立した独立した思考ではなく、インタビュー・ナラティブという社会的な場において立ち上がってくる社会的行為における意味である。文化がこうした社会的行為の過程で創られる意味の中に生成されるのであれば、こうしたディスコースそのものが今の社会を映し出す鏡と言えるのではないだろうか。

【付録】

データの文字化資料に使われている記号は以下の通りである。

- (.) 発話の間の一瞬の間を示す。
- (1.0) 1秒の沈黙があることを示す。
- え:: コロンは音の伸びを示す。
- [会話が重複して発話されている箇所。
- = 次の=記号との間が途切れなく続いていることを指す。
- だか 前後の発話より強勢のある箇所を示す。
- right- ことばの途切れを表す。
- ↑ イントネーションが上昇する語に付されている。
- ↓ イントネーションが下降する語に付されている。
- >> 前後の発話より速く話されている箇所。
- OH 前後の発話より声が大きくなっていることを示す。
- °oh° 前後の発話より声が小さく発話されることを示す
- hha 笑い声。
- @うん@ 笑いながらの発話を示す。

参考文献

- Duranti, Alessandro. (1986) The audience as co-author: An introduction. *Text — Interdisciplinary Journal for the Study of Discourse* 6(3): 239-248.
- Hill, Jane. (2005) Finding culture in narrative. In N. Quinn (ed.) *Finding Culture in Talk: A Collection of Methods*. New York, NY.: Palgrave MacMillan. pp.157-202.
- 小林美希 (2013) 『ルポ—産ませない社会』河出書房出版
- 小宮友根 (2007) 「規範があるとはどのようなことか」前田泰樹ほか編『エスノメソドロジー 人々の実践から学ぶ』pp.99-120. 新曜社
- 松木啓子 (1999) 「ナラティブアプローチの可能性と限界をめぐって—「異文化」理解の詩学と政治学—」『言語文化』1(4) 759-780. 同志社大学言語文化学会
- 中川まり (2010) 「子育て期における妻の家庭責任意識と夫の育児・家事参加」『家族社会学研究』22(2): 201-212.
- Norricks, R. Neal. (2001) Discourse markers in oral narrative. *Journal of Pragmatics* 33: 849-878.
- Ochs, Elinor and Taylor, Carolyn. (1996) The “father knows best” dynamic in family dinner narratives. In K. Hall (ed.) *Gender Articulated: Language and the Socially Constructed Self* Routledge. pp.97-121.
- Okamoto, Takako. (2008) An investigation of the supportive giving/receiving verbs (SGR Verbs) tekureru/temorau in the narratives of Japanese women who experienced childbirth and childcare: The direct and indirect indexicality of the SGR verbs. 『英米文学研究』43: 79-101.
- Pomerantz, Anita (1986) Extreme case formulations: A way of legitimating claims. *Human Studies* 9: 21-229.
- Quinn, Naomi. (2005) Introduction. In N. Quinn (ed.) *Finding Culture in Talk: A Collection of Methods*. New York, NY.: Palgrave MacMillan. pp.1-34.
- Sacks, Harvey. (1972) An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology, In D. Sudnow, (ed.) *Studies in Social Interaction*, New York: Free Press, 31-74.
- 笹川あゆみ他 (2015) 「夫婦間の性別役割分業はなぜ変わらないのか—既婚女性へのインタビュー調査から探る—」『アジア女性研究』24: 1-12.
- Sherzer, Joel. (1987) A Discourse-Centered Approach to Language and Culture. *American Anthropologist* 89(2): 2965-309.
- 白波瀬佐和子 (2006) 「日本と各国との比較 日・米比較」内閣府政策統括官(共生社会政策担当)『少子化社会に関する国際意識調査報告書』pp.143-168.
- 総務省 (2011) 「平成23年度社会生活基本調査」<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/gaiyou.htm> (2015年9月17日閲覧)
- Tannen, Deborah. (1995) Waiting for the mouse: Constructed dialogue in conversation. In D. Tedlock and B. Manheim (eds.) *The Dialogic Emergence of Culture*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press. pp.198-217.
- Tannen, Deborah. (ed.) (1993) *Framing in Discourse*. New York: Oxford University Press.
- Urban, Greg. (1991) *A Discourse-Centered Approach to Culture: Native South American Myths and Rituals*. Austin: University of Texas Press.
- Yamaguchi, Masataka. (2014) Discovering shared understanding in discourse: Prototypes and stereotypes. In M. Yamaguchi, D. Tay, and B. Blout (eds.) *Approaches to Language, Culture and Cognition: The Intersection of Cognitive Linguistics and Linguistic Anthropology*. New York, NY.: Palgrave MacMillan. pp.217-233.
- Yamaguchi, Masataka. (2007) Finding culture in narrative: The case of diasporic Japanese in the United States. In *SITES: A Journal of Social Anthropology and Cultural Studies* 4(1): 122-143.
- 任榮哲・井出里咲子 (2004) 『箸とチョッカーク—ことばと文化の日韓比較』大修館書店